



平成30年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」  
オリンピック・パラリンピック教育推進校

事業実施報告書

学校名【 横浜市立 神奈川小学校 】

1 実践テーマ	【スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築】
2 実施対象者	①全校児童 ②希望者 ③5年3組 総合的な学習の時間
3 展開の形式	(1) 学校における活動 ① 行事名（特別活動）チャレンジド・ビジットの実施 ② 行事名（放課後）チャレンジド・ビジット（2部）への自由参加 ③ 行事名（特別活動）障がい、障がい者スポーツ等について壁新聞製作 (2) 地域における活動 ① イベント名（横浜ラポール訪問）
4 目標 (ねらい)	○パラスポーツ理解を深めることでの障がい理解の深化と、多様な生き方に対する敬意、共生社会への意識の向上 ア) パラスポーツ理解 イ) トップアスリートとの連携・協働の推進 ウ) 地域との連携強化
5 取組内容	ア) パラスポーツ理解 イ) トップアスリートとの連携・協働の推進  ○チャレンジド・ビジットの実施 ・9月20日に朝日新聞社主催、大和ハウス工業協力によるパラスポーツ体験事業として実施（5年生が申請して招致） 第1部＝5年生がウィルチェアーラグビー日本代表選手を含む6名の来校によるスポーツ体験、選手との交流  第2部＝放課後の自由参加により、ブラインドサッカー、ボッチャの体験  この様子は、朝日新聞社および大和ハウス工業のHPに紹介されている ↓ <a href="http://www.asahi.com/ad/challenged_visit/2018/kanagawa/">http://www.asahi.com/ad/challenged_visit/2018/kanagawa/</a> <a href="https://www.daiwahouse.com/tokyo2020/activities/challenged_visit/kanagawa">https://www.daiwahouse.com/tokyo2020/activities/challenged_visit/kanagawa</a>



	<p>○パラリンピック絵画コンクールへ応募</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・事前に5年3組は総合的な学習にて「パラリンピック」の追究を開始しており（当学級では「パラボ（＝パラ・ラボ：パラスポーツの研究所の意味）」と呼んでいる）、「すごいぞ！パラリンピック絵画コンクール」に応募した。その結果、団体賞を受賞。12月2日付の朝日小学生新聞紙面に掲載された。</li> </ul>  <p>○障がい者スポーツ体験</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・5年3組では、総合的な学習の中で障がい者スポーツ体験を行った。写真はボッチャに取り組む場面。その他、音源走やブラインドテーブルテニスも体験した。</li> </ul>  <p>ウ) 地域との連携強化</p> <p>○横浜ラポールとの連携</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・5年3組では、横浜ラポールへの訪問、選手との交流を希望してきたが、横浜ラポールの協力のもと、横浜を拠点とするウィルチェアーラグビーチーム「横浜義塾」の活動への訪問を実現し、月村珠実選手への単独インタビューを行った。選手と交流する中で思いは膨らみ、月村選手に来校してもらうことを実現した。スポーツについての内容にとどまらず、選手の生き方にふれることで、さらに、障がい者スポーツを応援したい気持ちを大きなものにした。年度をまたぐことになるが、6年生に進級する次年度、月村選手の出場ゲームを現地にて応援する計画を考えている。</li> </ul>
<p>6 主な成果</p>	<p>○障がいのある方々との共生社会の在り方について学ぶ機会となった。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・チャレンジド・ビジット（第1部）では、5年生全員（90名）が競技用車いすに乗っての移動やタックルの体験を行ったことに加え、選手に直接質問することで、障がい者スポーツへの理解を深め、さらに選手の生き方・考え方にふれる機会を得、共生社会への理解も深めた。</li> <li>・チャレンジド・ビジット（第2部）では、4～6年生の有志がウィルチェアーラグビー、ブラインドサッカー、ボッチャの体験を行うことで、障がい者スポーツへの理解を深めた。</li> </ul> <p>○オリンピック・パラリンピックに対する知識が深まり、そこにかかわろうとする意欲の向上がみられた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・障がい者スポーツ体験を通じ、障がい者スポーツについて具体的に知ることになった。現在、自分たちが知ることになった特定の選手（チーム）を東京大会で応援しようという機運が5年生に高まってきている。</li> </ul> <p>○障がい者スポーツに携わる方々とつながることに結び付いた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・チャレンジド・ビジットをきっかけに、月村選手とふれ合ったことで、障がい者スポーツを応援しようという意識が高まった。さらに、障がい者スポーツを支える組織の方々とつながる可能性が高い。</li> </ul>

<p>7実践において工夫した点 (事業の特色)</p>	<p>○活動が継続的に行われるように、5年3組を核とした展開を計画した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・東京大会までの2年間を見据え、オリンピック・パラリンピック推進校としての活動展開が単発化しないように、学校として、総合的な学習で本内容に取り組む学年を奇数学年になるように仕掛け、児童の力による展開を意図して進めた。</li> </ul> <p>○校内における本事業の掲示コーナーを5年3組付近に設定し、情報発信元を固定することでの校内意識の定着をねらった。</p>
<p>8主な課題等</p>	<p>○チャレンジド・ビジットは、児童が招致を試みたもので、当選が確実ではない事業だったが、運よく実現することにつながった。今後の展開では、選手の応援など、現時点で実現の保障がないものが残っている。児童の活動より先に教師の段取り（実現の保障のための交渉等）を済ませておく必要がある。</p> <p>○5年3組は、次年度学級解体により3学級に分散される。学校として2020年までの活動の広がりを期待する以上、現担任が継続して次学年で指導できるようにするような学校組織を構築するなどの工夫が必要である。</p>
<p>9来年度以降の実施予定</p>	<p>○6年生を中心として、障がい者スポーツへの関わり方を模索していく。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・横浜ラポール、チーム「横浜義塾」月村珠実選手とのつながりを太いものにしていきながら、「2020東京大会」までの競技会場（スタンド）に出向き、自分たちの応援で盛り上げるなど、具体的な方向性を児童とともに作りあげていく。</li> <li>・学校行事（運動会など）を通して、地域にも本校が推進校であることをPRしていく。（児童主体の障がい者スポーツ紹介等）</li> <li>・トップアスリートを複数回招聘して、選手とのつながりを強くする活動をめざす。</li> </ul>